

「制作物の記録と観賞」が親性へもたらす影響の分析 ～スマートフォンアプリ“ツクルミュージアム”を事例に～†

佐藤 朝美 (愛知淑徳大学講師) 荒木 淳子 (産業能率大学准教授)

今野 知 (株式会社 Switch・エンタテインメント代表取締役) 佐藤 慎一 (日本福祉大学教授)

要旨

筆者らは、親の発達に重要な「親としての気づき」と「親子の相互作用」を促し、省察的な家族対話を引き出すファミリー・ポートフォリオの構築を構想している。本研究では、子どもの写真や動画、日記等の成長記録の中で、子どもの制作物を記録・観賞することに着目し、スマートフォンアプリ“ツクルミュージアム”による活動を分析した。その結果、活動への意識や取り組み方の違いがあることが顕在化し、また、展示室の作成や観賞が親性の「自己への認識-親役割の状態:子育てへの感情(欲求や充実感) /子どもとの時間(対話や関わり)」「子どもへの認識-子どもの内面(欲求や気持ち、性格や個性) /子どもの発達(発達段階や予測)」に寄与する可能性が示唆された。

キーワード: eポートフォリオ、成長記録、親性、親の成長、スマートフォンアプリケーション

1. はじめに

子育てや家庭教育を取り巻く環境が変動する中、家庭の教育力の低下が課題に挙げられ、子育てに関する親の学びの促進等、様々な取り組みが行われている(文部科学省 2011)。親が成長するには、「子どもと向き合う」必要があり、親自身が省察的に考える「リフレクションを促す家族対話」が重要であるという(Thomas 1996)。子どもの成長記録として、写真や動画を日常的に撮りためるほか、ソーシャルネットワーキングサービス(以下 SNS)等に記録し、家族や知人と共有する人が増えている現状を踏まえ、筆者らは親の学びや成長を促す成長記録システムとして、家族の記録を蓄積していくファミリー・ポートフォリオの構築を構想している(佐藤ら 2013)。

2. 本研究の目的

本研究ではファミリー・ポートフォリオの構成要素の一部として、子どもの制作物の記録に着目する。

池内(1999)は、絵画や作品をポートフォリオ化することの効果について、ハワード・ガードナーらのハーバード大学プロジェクトゼロにおける一連の研究の知見をまとめている。教育現場でポートフォリオ評価法を用いることで、学習過程や成長をみることが可能となり、教師自身が納得でき、保護者にも提示することで評価の内容解説などできるという。さらに池内は、初等教育における図画工作の、立体造形物も含めたデジタル・ポートフォリオ評価方式の計画案を提示している。デザイナーやアーティストのポートフォリオと異なり、教育現場では、オリジナルスケッチ、下絵、反省なども入れることが効果を高める。そこで、三次元の立体作品も含めた多くの情報を取り入れるデジタル・ポートフォリオが提案されている。

以上のプロセスは、養育者である親にも当てはまると考える。しかし、日常行っている成長記録の活動と親の成長との関係性を検討する先行研究はみられない。そこで本研究では、操作が容易なツールを用い、親が子どもの制作物をデジタル・ポートフォリオ化することについて検証する。アプリの活用により、絵画のみならず、立体物等の多様な制作物、さらにはそのプロセスを記録し、観賞する活動が、親の成長に影響をもたらすのか質的に検討することを目的とする。

3. アプリの機能と活動のねらい

3.1. ツクルミュージアムの機能

“ツクルミュージアム”は、作品の写真とコメントを登録することにより展示室を作成・観賞できるスマートフォンアプリである(SATO et al. 2014)。

†Ibmomi Sato*1, Junko Araki*2, Satoru Konno*3, Shinichi Sato*4: Analysis of Smartphone Application “Children’s Own Museum” as an element of Family Portfolio.

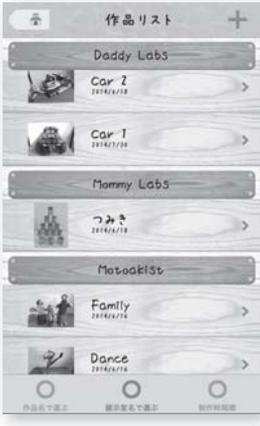
*1 Aichi Shukutoku University, 2-9, Katahira, Nagakute, Aichi, 480-1197 Japan

*2 SANNO University, 1573 Kamikasuya Isehara city Kanagawa, 259-1197 Japan

*3 Switch entertainment Inc., 4-4-1, Nakano Nakano-ku, Tokyo, 164-8512 Japan

*4 Nihon Fukushi University, 2 Okuda, Mihama-cho, Chita-gun, Aichi, 470-3295 Japan

図1 “ツクルミュージアム”の画面

1) トップページ	2) 作品リスト	3) 作品登録画面	4) 展示室
			
スマートフォンで動作。起動後、2) 作品リスト画面が表示される。作品は、スマートフォンのカメラ機能を用いて撮影できる。	「作品名」、「展示室名」、「制作時期」の表示ボタンにより、作品の一覧が表示される。	1 作品に対し、「作品名」、「作者名」、「制作時期」、「展示室名」、「作品解説」と7枚の写真（メイン画像を指定可能）を登録できる。	ミュージアムの展示室では、1 作品毎に、登録した写真と「作品名」、「作者名」、「制作時期」「作品解説」が表示される。

1) トップページでは、作品を撮りためると、一覧が丸くランダムに表示される。アプリ初期画面をクリックすると2) 作品リスト画面が表示される。

2) 作品リスト画面では、登録した作品がリスト表示される(図1)。「作品名」、「展示室名」、「制作時期」ごとに表示することが選択でき、家族メンバーごとに作品数を比べたり、時系列でこれまで制作した作品を振り返ったりすることができる。右上の「+」ボタンを押下すると、3) 作品登録画面が表示される。作品名を選択すると、4) 展示室が表示される。

3) 作品登録画面では、「作品名」、「作者名」、「制作時期」、「展示室名」、「作品解説」を入力する。「作者名」は、新規追加と同時に、これまで入力した作者が候補としてリスト表示される。「作品解説」では、作品の内容だけでなく、子どもから感想を聞いて入力したり、頑張った様子等を記入する。また、1作品に対し7枚の写真を登録できる。作品の写真はスマートフォンのカメラ機能を用いて撮影するか、事前に撮影した写真をスマートフォンのアルバムから選択する。立体作品の場合は上下左右等複数枚撮影する。また、作品の完成後の写真だけでなく、制作途中のプロセスや子どもの表情等も撮影しておく等、自由に登録できる。

4) 展示室では、登録した作品を鑑賞できる。登録した写真と「作品名」、「作者名」、「制作時期」「作品解説」が表示される。

3.2. 制作物を記録・観賞する活動のねらい

ファミリー・ポートフォリオ構想で支援する親の発達や成長は、「親性」という概念を適用する。「親性」とは、「母性と父性とを統合した性質で、親が自分の子どもを養育育てようとする性質」と定義されている(林 2006)。従来、親の性質を表す用語として「母性」や「父性」が用いられてきたが、ジェンダーフリーの概念として「親性」という用語が広がりつつある。大橋ほか(2010)は、「親性」がライフステージとともに発達していくものとして、育児期の親性尺度を作成し、自己への認識と子どもへの認識とともにサブカテゴリーを整理している(表1)。

表1 親性尺度の要素(大橋ほか(2010)より筆者作成)

自己への認識	<p>「親役割の状態」 子どもに接しながら、授乳や排泄の世話といった育児能力を身につけ、育児に関心を持ち親としての役割に満足感を抱いている状態 [a:子育てへの感情(欲求や充実感) b:子どもとの時間対話や関わり]</p> <p>「親役割以外の状態」 夫や妻といった役割をもち社会で働く存在認識を示し、自己肯定感や社会との関係性を含む</p>
子どもへの認識	<p>子どもとの関係を育みながら、子どもの現在と今後の成長・発達の様子の理解を深め、愛情をいできながら接している様子 [c:子どもの内面(欲求や気持ち、性格や個性) d:子どもの発達(発育の段階や予測)]</p>

本研究では、「ツクルミュージアム」による制作物を記録・観賞する活動から、親性の要素「自己への認識 - 親役割の状態」のサブカテゴリー [a: 子育てへの感情 (欲求や充実感) b: 子どもとの時間 (対話や関わり)] と、「子どもへの認識」のサブカテゴリー [c: 子どもの内面 (欲求や気持ち、性格や個性) d: 子どもの発達 (発育の段階や予測)] への影響について検討する。

4. 制作物を記録・観賞する活動の評価

4.1. 分析方法

【実験協力者】 未就学園児～低学年児のいる親9人に「ツクルミュージアム」を1ヶ月間使用してもらった。都合により対面でのインタビューが行えなかった1名を外し、8人(母7人・父1人)を分析対象とする。

【分析データ】 アプリ使用前と後に質問紙に回答してもらった。事前では職業の有無、日常のパソコンや携帯、SNS等の活用状況、事後にはアプリと活動全般に関して5段階評価でたずねるほか、アプリへの要望に関して自由記述の欄を設けた。また、前後共通で家族の記録を行う頻度、子どもと夫婦間との対話時間についてたずねた。

使用後に1人ずつ30～45分程度の半構造化インタビューを行った。質問項目は、親性尺度を参考に、制作物の記録と観賞をすることで、生じた変化やそのきっかけを特定することを意図して設定した(表2)。本研究では、どのような機能に効果があるのか、親の資質により差があるのか、さらにはアプリから派生する活動(対話や工夫)についても網羅する形で把握するために、尺度で効果を測るのではなく、活用状況を見せてもらいながらのインタビューとした。発話は全てプロトコル化し、尺度項目の発言数をカウントした。分類は別々に2名で行い(一致率73%)、不一致箇所は話し合いにより確定した。

表2 インタビュー項目

1. アプリ使用の感想
2. 作品を撮りながら、お子さんの作品づくりについて気づいたことはありますか
3. 作品を通じて、お子さんとの対話がありましたか
4. 作品を通じて、ご夫婦での対話がありましたか
5. ツクルミュージアムを利用する前と比べて、ご自身のお子さんへの気持ちに変化はありましたか
6. ツクルミュージアムの利用を通じて、ご自身の親としての気持ちに変化はありましたか
7. ツクルミュージアムの利用を通じて、パートナーへの気持ちに変化はありましたか
8. (働いている人の場合) ツクルミュージアムの利用を通じて、ご自身の仕事やキャリアに対する気持ちに変化はありましたか
9. 今後もツクルミュージアムを使ってみたいと思われませんか

4.2. 結果と考察

1) 質問紙

実験協力者の属性は、全て正社員かパートであった。全員がいずれかのSNSを使用しており、本アプリの操作に問題はないと考えた(表3)。主にアプリに作品を掲載する子どもは、第一子が5組、第二子が3組であった。家族の記録を行う頻度や対話時間は、事前・事後でほとんど変化はなかった。

アプリの使用に関しては評価が高く(表4)、自由記述では、「もともと写真を撮ることが好きで、よく撮っていますが、『子どもの作品』に目を向け続けることは気にとめてなかったのが楽しかったです。(親B)」、「このような形で写真として記録に残すことができれば、無駄に家の邪魔にもならず、いつでも見返して楽しむことができるなと思い、とても良かったです(親H)」という記述があった。また、ミュージアムとして保存されることに付加価値を感じる記述「子どもがコメントできたり、大人がコメントできたりと異なった視点で管理できるのは良いと思う。『アルバム』だけ以上の思い出になると思う(親D)」もみられた。

2) インタビュープロトコル

インタビューでは、「自己への認識 - 親役割の状態 (a, b)」、「子どもへの認識 (c, d)」の下位項目に関連した発言数についてプロトコルデータより検討する(表5)。

[a: 子育てへの感情 (欲求や充実感)] に関しては、他の項目に比べ、発言数は少なかった。しかし、親として子どもの成長を記録する責任 [親B/D] やそれを確認する楽しさに言及する発言 [親F/G] がみられた。さらに、見返

表3 実験協力者属性

項目/親	A	B	C	D	E	F	G	H
職業	パート	パート	正社員	パート	正社員	パート	パート	パート
子どもの年齢	5才1才	13才9才	5才	19才12才	5才	8才6才	5才	5才2才
SNS利用状況	LINE FB	LINE	mixi	LINE	LINE FB Twitter mixi Skype	LINE FB	mixi Skype	LINE
携帯での写真撮影	5日以上/1週間	2日/1週間	1日/1週間	2日/1週間	2日/1週間	3日/1週間	5日以上/1週間	2日/1週間

表4 ツクルミュージアムの使用について

項目	平均
ツクルミュージアムを使うことは楽しかった	4.38
ツクルミュージアムを使うことで写真を撮ろうという気持ちになれた	4.00
子どもの作品の写真を撮るのは楽しいと思った	4.88
ツクルミュージアムをもっと使ってみたいと思う	4.13

表5 親性尺度項目に関連した発言数

項目/親	A	B	C	D	E	F	G	H	平均
a:親・感情	3	5	3	6	1	4	3	5	3.75
b:親・時間	6	4	8	9	9	1	4	4	5.625
c:子・内面	10	10	10	3	6	3	3	1	5.75
d:子・発達	1	8	5	7	2	5	1	5	4.25
合計	20	27	26	25	18	13	11	15	19.37

す楽しさに加え、子どもが作品に嬉しさを感じ、そこから親自身の成長についても触れていた[親H]。

発言数が少ない親Eは、子どもとの対話は多く、子どもの内面に触れる発話が多いものの、親役割を果たす自分を意識した発言は少なかった。子どもに向き合いながらも、親である自己への認識が低いケースに対し、充実感や成長実感を促す仕掛けを検討する必要があると考える。

親B: もともと、これですずっと収めていて、撮りためたもの、そのままだったので、ちょっとコメントを付けておいておくのも大事だな、と。

親D: やっとまとめられた、っていう安心感。今までほったらかしにしていた写真を、とりあえず、すぐ取り出せるように整理できたっていう。それはあります。

親F: でも、振り返れるのが本当にいい時間ですよ。うん。

親G: で、きれいに整理されているから、また何回か見ようという気に。

親H: でも、子どもが何か作ったものとか、何か、そういうのは、やっぱり親は非常にうれしいと思います/やっぱりお母さんも、子どもに育てられるということはすごく大きいと思うんですよ。

【b: 子どもとの時間(対話や関わり)】に関する発言では、子どもの思い入れや気持ちを聞いてコメント入力する[親A]だけでなく、展示室を一緒に見ながら課題を話し合う様子もみられた[親G]。子どもの方から作品を記録してほしいというケースが多くあった[親E]。またパートナーへ情報共有する様子もみられ[親D]、家族の対話が増える様子がうかがわれた[親H]。

子どもがミュージアムを作る意欲に関する発言が多く見られる親D/Eに対して、発言数の少ない親Fは、日常の対話時間は質問紙の回答では事前・事後で1時間~2時間未満で多いが、アプリ使用に関しては、親主導で行っていた。制作物のポートフォリオ化は、親が行うだけでなく、記録と観賞の活動を子どもとともに行うことが親性への効果を高めることになると推察されるため、支援方法を検討する必要があると考える。

親A: 思い入れを話してます。「これは、ここをこうやってやるといいんだよ。知ってる?」とか。

親D: これで、さっきのこれで作ると、だいたい子どもは(父親に)見せに行くので。

親E: 撮って、撮って、ツクルミュージアムに入れて!というのを、本人が。

親G: 「でも、次はこうやってみたらこうなるかなあ」というようなのを2人で話します。

親H: やっぱり、そうやって家族の会話が増えるきっかけにはなるのかなとは思うので。

【c: 子どもの内面(欲求や気持ち、性格や個性)】に関する発言では、制作物の写真を振り返りながら子どもの工夫[親A]や作品の特徴[親E]、子どもの意図通り作れなかった様子[親G]を語る内容があった。

親A/B/Cは、子どもが好きなもの(工作・アイロンビーズカラフルなもの)に関する発言が多く、発言数の少ない親H(保育士)は、普段から子どもの作品の特徴を把握していたという発言があった。本アプリによる活動はこれまで子どもの制作物に無自覚だった親に対し、写真を撮ったり子どもから考えを聞いてコメントを入力するという記録を通して、子どもの内面に触れる有効な機会になっていたものとする。

親A: ふたを付けて、それをこう、中から飛ばす。それをすごいおもしろがって、「これは工夫なんだよ」って。

親E: 映画館ごっこをするときに、装飾を作って。映画館のディスプレイをするんですね。○君は、そういう創作というか、何か、そのものではなくて関連づけが好きみたい。

親G: こうしたかったのにならなかったというのがあって。…その、それも、造花の葉っぱを入れて、落ち葉みたいに落ちてくるのを想像して、切って入れたんですけど、結局軽くて上に浮いたままなんです。

【d: 子どもの発達(発育の段階や予測)】に関する発言は、作品リストを見返すことで、制作物の材料や描く対象、遊びが変化していることから成長を実感している様子がみられた[親B/D/H]。

発言数の少ない親Gには、「前々から残したいと思っていた」、「見直すきっかけがないですね」とこれまでの状況を語り、見返す時間が無いことに触れていた。多忙な親に対して、観賞する時間を設けるきっかけを作ること、さらに容易かつ気軽に観賞できるような仕掛けを検討することが必要である。

親B: 最初は、ほんとに積木とかブロックだったのが、だんだん、空き箱とかそういうものを使って何か作り始めたりとかっていう、だんだん、こう自分が使っていくものが、ちょっと変わってきたのはわかるかな、っていう。

親D: そうですね、成長の過程みたい。あの時こんなのはまって、っていう。

親H: 気楽に子どもの思い出とか記録をつづっていくことができるんで。でも、そんな中で、見返して、成長を感じることはできるので。

5. まとめと今後の課題

本研究では、「親としての気づき」と「親子の相互作用」を促すファミリー・ポートフォリオの構成要素として、「制作物の記録と観賞」に着目し、親性への影響を半構造化インタビューにより分析した。プロトコルから、記録の行為が、保管の問題を解消するだけでなく、成長記録を行う親の責務を果たす肯定感を生み、子どもへの関心を抱ききかけとなっている様子がみられた。また、制作の過程を記録することで子どもとの関わりが増え、子どもから親に作品の登録依頼があり、子どもと一緒に観賞しながら、次の作品について対話する様子がみられた。さらに、作品への思い入れを子どもから聞いたり、展示室やリストの観賞から特徴を把握する等、子どもの内面に触れるきっかけとなっていた。作品を時系列で観賞することで子どもの発達について考える様子もみられた。以上のことから、制作物の記録と観賞が親性の要素「自己への認識 - 親役割の状態」、「子どもへの認識」を促すきっかけとなったと考える。

一方、質的な分析から親の記録に対する姿勢や取り組み方の違いが明らかになった。子どもに目が行きつつも親である自己への役割や成長の自覚にまで至っていない親、親としての責任を感じ記録を付けるが、子どもとの共有を楽しむ活動までに至っていない親、長期的な視野での成長を概観するまでに至っていない親等である。このような違いに応じた支援方法を検討し、システムを設計していくことが課題である。また、親性の「自己への認識 - 親役割の状態」、「子どもへの認識」を促すかに関する検討を行っており、省察的な家族対話を引き出したかの評価までは至っていない。さらに、8名という少数の半構造化インタビューによる質的な分析のみで、親性への効果について質問紙調査で量的に検証することも課題である。

今後は、「自己への認識 - 親役割以外の状態」も含めた「親性」の支援とともに、省察的な家族対話の支援を行うファミリー・ポートフォリオを構築する予定である。そのため制作物以外の成長記録、子どもだけでなく親自身の記録内容も検討していく。

謝辞

実験に協力下さった9組の親子に、深く感謝致します。本研究はJSPS 科研費 25350923 の助成を受けたものです。

(参考文献)

- 文部科学省 (2011) 「子どもたちの未来をはぐくむ家庭教育」ブックレット http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/katei/1312143.htm (参照日 2015.03.31)
- 林昭志 (2006) 親を生涯発達の観点から捉える試み: 乳幼児期の親の発達について. 上田女子短期大学紀要 29, pp.1-9.
- 大橋幸美, 浅野みどり (2010) 育児期の親性尺度の開発: 信頼性と妥当性の検討. 日本看護研究学会雑誌 33(5), pp.45-53.
- Thomas, R.(1996)Reflective dialogue parent education design: Focus on parent development. Family Relations 45(2),pp189-200.
- 佐藤朝美, 荒木淳子, 今野知, 佐藤慎一 (2013) 親の発達を促す省察的な家族対話を支援するファミリー・ポートフォリオに関する研究. 日本教育工学会第29回大会講演論文集, P2a-1-301-10.
- SATO,T.,KONO,S.ARAKI,J,SATO,S.(2014) Development of the Smartphone Application "Children's Own Museum" as an Element of a Family Portfolio. Proceedings of ED-MEDIA 2014. pp.1007 -1011.